

被爆体験を〈書く〉

—— 山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に ——

キアラ・コマストリ

はじめに

本稿は、山代巴に視点を据えて「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉」について考えるという意図から、山代巴が大牟田稔ら「広島研究の会」の仲間たちと一九六五年にまとめたルポルタージュ『この世界の片隅で』を中心に検討する。しかしながら、一九六五年の『この世界の片隅で』を適切に位置づけるためには、一九五三年に山代巴が川手健らとまとめた被爆者の手記集『原爆に生きて』からの流れを明らかにする必要がある。そこで、本稿では、一九五三年の『原爆に生きて』から一九六五年の『この世界の片隅で』を見通すかたちで、議論をしていきたい。

翻つて考えてみると、被爆二〇年にあたる一九六五年は、宇吹 暁編『原爆手記掲載図書・雑誌総目録 1945-1995』（日外アソシエー

ツ、一九九九年）を参照すればわかるように、被爆体験に関わる数多くの書物が刊行された年であった。なかでも注目すべきものとしては、たとえば、一九五〇年に印刷までされたものほとんど配布されなかった広島市民生局社会教育課編『原爆体験記』（広島平和協会）に基づく広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』（朝日新聞社）、この年刊行された代表的な手記集の一つである広島県被爆者の手記編集委員会編『原爆ゆるすまじ』（新日本出版社）、以後長く読み継がれることになる大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（岩波書店）などを挙げることができる。

しかしながら、「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉」という観点に立つ時には、本稿が議論の対象とする山代巴編『この世界の片隅で』（岩波新書、一九六五年）は、これらのなかでも特別な重要性を持つ書物だと言える。いわゆる原爆スラムや被差別部落に暮らしている人々、原爆孤児や沖繩の被爆者などといった、当時顧み

られることの少なかった人々の「この世界の片隅で」の営みがこのルポルタージュの主題となつていっているからである。

本稿では、『この世界の片隅で』を関心の中心に据えつつ、次の三点を課題とする。第一に、編者山代巴と被爆者との関わりを明らかにする。後述するように、山代巴と被爆者との関わりは、必ずしも恒常的なものではなかった。ではいつどのような関わりがあり、その関わりは山代巴にどのような影響を与えたのか。そういうことを明らかにすることが、第一の課題である。第二に、山代巴らと被爆者との関わりのなから生まれてきた手記集『原爆に生きて』（三二書房、一九五三年）を、『この世界の片隅で』の原点として位置づける。前述したように、『この世界の片隅で』を適切に位置づけるためには『原爆に生きて』からの流れを明らかにする必要があるため、第二節ではこの課題に取り組む。第三に、『原爆に生きて』との違いや、同時代の他の書物との関係に留意しながら、『この世界の片隅で』の特徴を明らかにする。『この世界の片隅で』を当時の言説空間のうちに位置づけることにより、その意義を際立たせたい。

1 山代巴と広島／被爆者

山代巴は、一九一二年に備後の農村に生まれ、東京の女子美術専門学校に進学し、のちにはプロレタリア美術運動、さらには共産主義運動に関わって、夫の山代吉宗とともに逮捕・投獄された。その後一九四五年八月に病気の悪化により仮釈放されたため、敗戦は自宅を迎え、以後六〇年代初めまで、備後の農村を拠点と

して、農村女性を主な対象とした文化運動を展開していった。著者に、のちに映画化された『荷車の歌』（筑摩書房、一九五六年）があるが、農村に生きた一女性を主人公とするこの作品は、彼女の活動の基盤がどこにあったかをよく示している。

山代巴が戦後初めて広島を訪れたのはGHQに呼び出された一九四五年一月のことで、以後彼女はしばしば広島を訪れ、広島青年文化連盟や新日本文学会広島支部で、大村英幸や峠三吉、峠周辺の青年たち（とくに川手健ら広島大学の学生たち）と交流を深めていった。この時点では、山代巴の基盤は備後の農村にあったが、一九五二年春、峠が咯血して倒れたため、年長の山代が広島に呼ばれ、当時進行中であつた子供たちの被爆体験詩集（のち『原子雲の下より』として刊行）の編集や、原爆被害者の手記集（のち『原爆に生きて』として刊行）の編集を、川手健らとともに担うことになった。山代は、この仕事が一段落した一九五三年夏には農村に戻り、一九六二年には創作活動の都合により東京に出る。その後、一九六四年に東京で川手健の五回忌の集まりが持たれたのを機に、「広島研究会」が結成され、一時山代巴も広島に住み込むことになる。その研究成果として刊行されたのが、『この世界の片隅で』である。

このように、山代巴と広島／被爆者との関わりは、手記集『原爆に生きて』を生み出した一九五二〜五三年と、ルポルタージュ『この世界の片隅で』を生み出した一九六四〜六五年に集中しており、必ずしも恒常的なものではなかった。しかしながら、この関わりは、山代巴にとって決定的な重要性を持ったと考えられる。本稿では、『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』に即して、その重要性を考えていくことになる。

2 手記集『原爆に生きて』をめぐる

1では、山代巴を簡単に紹介するとともに、彼女と広島／被爆者とのかわりについて見てきた。ここでは、山代巴らの文化運動が結実させた手記集『原爆に生きて』を主に論じ、同じ時期に出た他の手記集と比較しながら、その重要性を際立たせるとともに、ルポルタージュ『この世界の片隅で』の原点として位置づきたい。

占領下の広島では、峠三吉を中心に、われらの詩の会や新日本文学会広島支部に結集した青年たちによって、反戦平和の文化運動が取り組まれていた。一九五〇年に朝鮮戦争が始まると彼らに対する抑圧はいつそう強まるが、彼らは果敢に抵抗し、新日本文学会広島支部は、子供たちの被爆体験詩集『原子雲の下より』を編集刊行したのち、こんどは大人の被爆者の手記集を編集刊行するという仕事に取り組むことになる。しかし、一方には占領下・朝鮮戦争下での政治的抑圧があり、一方には被爆者に対する差別意識が広範に存在しているという状況においては、それは容易なことではなかった。『原爆に生きて』の「序」には、原爆被害者の手記はどのようにして集められ、またそれはどのような困難なのかでどのように編集されたのか、といったことが述べられている。

まず重要なことは、「新聞やラジオによる募集には、あまり頼らず、我々が被害者の家を直接訪問してお願いし、書けない人々のは代筆してもいい、発表の機会に恵まれない人々の、手記を書かれることに重点をおこう」（『原爆に生きて』「序」、一頁）という

方法がとられたということである。また、自分で書けない人の手記は代筆してもいいが、本人の意向に沿わないことはいっさい書かない、という方針もとられた。山代巴らは、「手記に協力する場合、自分達の主観をまじえないと言うことを原則とし……必ず本人の意志に従って書き、本人の意志どおり纏めました」（同前、七頁）と述べている。この手記集では、諸事情に配慮して匿名を用いるということも普通に行われている。このように、「発表の機会に恵まれない人々」に直接アプローチしてその「手記」を世に出すこと、言葉を持たない人々のところに出かけていき、その声を社会に届けることが、最優先されたのであった。しかし、本人の意向を尊重しようとする、被爆者の訴えをそのまま文章にすることはできず、手記は「環境の制約や、いろいろの遠慮から、私どもが直接うったえられた言葉のように、赤裸な言葉で書くことが出来なかつた弱さを持つて」（同前、七頁）いるという問題が生じ、山代らは、直接会って訴えかけられたときの強さが、本人の意向に沿って手記を編集するうちに失われてしまう、という矛盾に直面したのである。

しかし、山代らは、そこにこそ問題があると考え、「なれてしまえば何もなく住めるこの社会の病こそは、原爆患者の口に、目に見えぬくつわをはめていると気づいた時、たとえ弱くとも、せい一杯の力で、患者の言葉を同胞に訴えようと思つて、我々は敢えて弱いままの手記を集録した」（同前、九〜一〇頁）と述べている。たとえ弱くても、被爆者自身の言葉によって、彼らの口にはめられた「目に見えぬくつわ」をはずそうとしたわけである。

原爆被害者の手記編纂委員会の最も重要な担い手であった川手

健は、このような問題を原爆文学の問題として受け止め、手記集刊行の直後に発表した「原爆文学についての雑感」（『広島文学』一九五三年八月号）の「原爆の手記のこと」という一節で、「文学が被害者を前進させ更に多くの真実の声をあげさせる。そういうものにならなければ原爆文学の価値は半減すると思う」（二七頁）と述べている。被爆者の手記の編纂という（運動）を、原爆文学の（表現）の問題としても受け止めた川手健は、手記編纂と並行して吉川清らと被爆者の組織化を進め、最初の被爆者組織「原爆被害者の会」の結成に尽力したのであつた。被爆者の戦後史において「空白の一〇年」（敗戦後の一〇年間を指す。この表現については、たとえば広島県被団協「空白の十年」編集委員会編二〇〇九参照）と呼ばれる時期に、このような（表現）と（運動）があつたことは、銘記されるべきであろう。

次に、『原爆に生きて』の性格をさらに明確にするために、同書の構成に注目するとともに、同時期に編まれた別の手記集と比較してみたい。

『原爆に生きて』は、三部に分けて二七編の手記が収められており、山代巴の序文が冠せられている。第一部「生きる」には、老若男女六人の被爆者が書いている。第二部「歩み」には、人生の半ばを過ぎてから原爆に遭つた四〇代から八〇代にかけての二人の手記が収められている。第三部「叫び」には、当時中高生だった人たち（五三年の時点で全員二五歳以下）の手記九編が、川手健の「半年の足跡」も含め、収められている。「生きる」「歩み」「叫び」といった各部のタイトルからうかがわれるように、この手記集では、原爆が落とされた日の体験そのものよりもむしろ、被爆

者たちの被爆前の人生がどのようなであつたか、被爆後彼らはどのように生きぬいてきたか、そして現在何を求めているか、といったことに重点が置かれている。このことは、「原爆に生きて」というタイトルそのものにも反映されていると言つてよいであろう。

このような特徴は、一九五〇年にまとめられた『原爆体験記』と比較してみるとより明瞭になる。「原爆に生きて」に手記を寄せている人々のうち、二人は『原爆体験記』にも手記を寄せているので、ここでは、この二人が異なる手記集に寄せた手記を比較してみたい。

そのうちの一人は、檜垣兵市という人で、一九五〇年の『原爆体験記』には本名で「胸に秘めた悲哀」という手記を、一九五三年の『原爆に生きて』には檜垣干柿という筆名で「短かき夜の流れ星」という手記を寄せている。ここでオープンングとエンディングを比較してみると、以下の通りである。「原爆体験記」の手記のオープンングは、

日々夜々の空襲を避けるため、市内観音町地先埋立地の三菱重工業株式会社、広島製作所は、工場を己妻の山間に事務所は郊外各所に散在疎開させた。こゝは人事課己妻の善法寺である。

あの日あの朝一閃一爆に恐怖を抱き、一ツ時事務机の下に身を屈めていたものが、のこのこと頭をもたげ互に無事を喜んだ課員は十名ばかりであつた（『原爆体験記』、八七頁）。

と被爆当日の語りから始まつている。これに対して『原爆に生き

て』の方は、

私は広島島の空鞆町という川端の町に育ったが、原爆の爆心地の対岸で約六、七百米距った神社の傍に生家があった。原爆で生き残った知人はわずか二名で小さい町ではあったが、町民は全滅したのだと聞いた。

ここでの幼い頃……（『原爆に生きて』、一七頁）

と、生まれ育った町の話から始まっている。この手記は『原爆体験記』の手記に比べると非常に長く、戦前の幸せな暮らしのことや、戦争が次第に激しくなるにつれて変化していった人々の暮らしの様子が窺える。当時の広島島の状況をよく表しているものとして、以下の文章が挙げられる。

次の年、支那事変は重大化し、私は八月三日雨後の早朝紙屋町で宇品に向かって出征する赤十字社の看護婦がうち振る小旗に、婦人従軍歌を合せて見送り、八月二十一日旭川部隊の出征で、アイヌ人の兵隊を見たりするなど、其後の時局は深刻に深刻を加えて遂に十年にして広島をして灰燼の廢墟としてしまった（『原爆に生きて』一八頁）。

「短かき夜の流れ星」では、戦後の状況も語られており、「学校では……慰霊塔を建てる計画で寄附を集めたが進駐軍の関係で中止」（二三頁）になったという、占領下の広島島の状況が描かれている。一九五〇年に書かれた『原爆体験記』の手記には、社会

的な状況を表すような記述は見当たらないのである。

さらに、原爆投下に始まり三日目で終わる「胸に秘めた悲哀」に対して、「短かき夜の流れ星」は、七月二四日から一〇月二九日にいたる日記が引かれており、最後には長男の手紙が二通（一九五二年一月二日、九月一日）引用されている。

『原爆に生きて』の手記と『原爆体験記』の手記との違いをさらによく表しているのは、手記のエンディングである。『原爆体験記』の手記は、

私は長年左の眼下に黒大豆太さの黒子を持つていた。原爆後三日目頃から、この黒子に水分を持つてジク／＼として来たのが二、三日にして、黒子はきれいに取れて仕舞った。生き残った家族が集つてそれを笑つたが、それも淋しかった（『原爆体験記』、九三頁）。

と何気ない日常で終わっているのに対して、『原爆に生きて』の手記では、

一家三人の男児を持った私が戦災で次男を亡くし、失望の中に又妻を亡くしたが、長男は母の薫陶空しからず、現在阪大医学部に入局研修中で、冬来りなば春遠からじの日を待つて希望に燃えた日を過している。母亡き後の長男は全生命を専ら私の健康の上に見出さんとしている。三男亦高等学校の二年であるが彼も将来を夢みている（『原爆に生きて』、三九〇頁）。

と、妻と次男を喪った著者が長男と三男の将来に期待をかけるかたちとなっている。

このように二つの手記は、それぞれ五〇年と五三年という比較的短い間で執筆されているのに、執筆者が同一人物だと思えないくらい異なっていることが明らかになった。

『原爆体験記』と比べると、『原爆に生きて』では、被爆前後の生活が詳しく書かれているという違いだけではなく、執筆者の態度も、ただ自分の悲惨な体験を語るという姿勢から、批判性と自覚を持った主体への転換が見られる。このことは、二人目の手記を見ていくとさらに明確になる。

もう一人の両手記集に共通する書き手は、中前妙子という人物で、一九五〇年に寄せた手記が一九六五年版の『原爆体験記』に「師とともに泳ぐ」というタイトルで収録されている。一九六五年版の『原爆体験記』を、そのもともになった一九五〇年の手記集と比べてみると、一九五〇年の『原爆体験記』には、手記一八編とぬきがぎ一六編が収録されているのに対して、一九六五年版では、ぬきがぎが省略され、さらに十一編が加えられていることがわかる。また、再録されている一八編の手記について見てみると、タイトルが変更されているものや執筆者名が変わっているものがあり、内容に加筆・削除がなされているケースも少なくない。たとえば、前述した檜垣兵市による「胸に秘めた悲哀」は、一九六五年版では、「浩よ、ねむれ」というタイトルになっており、檜垣兵市の「兵」は、「浜」という字に変更されている。ただし、手記の内容は、まったく一致している。一方、中前妙子の「師と

ともに泳ぐ」の場合は、一九五〇年版には収録されておらず、一九六五年版にはじめて収録されている。執筆者の中前妙子は、一九五三年の『原爆に生きて』には、「牧かよ子」の名で「すみれのように」という手記を寄せている。一九六五年版の『原爆体験記』に収められている証言と、『原爆に生きて』の手記とは、オーピングは似ているが、中盤以降は内容が大きく異なる点特徴である。

まず原爆投下時の記憶とその数日後の出来事を見てみると、『原爆体験記』の手記は、

後を振り向くと物凄い火がどンドン襲って来る。やつこのことで鶴見橋のたもとまで辿り着くと、遠近から避難して来る人で一杯だ。そのいづれの人々も全裸や半裸となり、衣服をまとった人といえば、ボロボロとなった物だけ。どす黒い、汚れた傷を受けた顔、顔、後から来る人もみな同様だ。誰も彼も上ずった声で名を呼び合ったり、泣いたりしていた。……みな我こそと川へ飛び込んで逃げ出した。……脇田先生に手を持っていただいで泳ぐことになった（一九六五年版『原爆体験記』、一九三〜五頁）。

と投下直後に目にした悲惨な光景やそのとき出会った人々の様子など、当日のことが詳しく述べられている。これに対して、『原爆に生きて』の手記にはそういった描写はほとんどなく、当日のことは少ししかふれられていない。金輪島の救護所へ送られ、父親と再会し、妹の死を歎く場面で終わる「師とともに泳ぐ」に対

して「すみれのように」では、原爆投下の日の記憶よりもむしろ、その後の生活の様子、特に原爆症との闘いに重点が置かれていることがわかる。

下敷になった私は、やつとのことではい出で、ただ助かりたい一心で逃げた。どんなに深い傷を受けたとも知らず、白いユニフォームを血で真赤に染めながら。

軋々と逃げている中に兵隊さんに助けられ、私は金輪島に送られた。父は丁度五日目に私を尋ねて来て下さった。再会出来た時の嬉しかったこと。だが哀れにも妹は大火傷のため死んでしまったということだった。……

なつかしい観音村の我が家に帰り、色々と看護してもらって傷も大分良くなったが、八月二十五日頃から班点が出、四十三度という高熱と闘わねばならなくなった（『原爆に生きて』、二五四頁）。

また、主人公が女性であることから、結婚や出産に対する不安なども淡々と書かれている。

もし幸運にも結婚出来たとしても、不妊、畸型児等の事を思うと不安でならない。……

私が眼鏡をかけて街を歩いているといやな事をいったり好奇心な目で眺めたりする人がいる。……残された片目は一二の視力を持ち乍ら、醜さを少しでもカムフラージュしたらと思っかけているのに、私の気を知ってか知らないで

か物好きな人はいろんな事を詮索して喜んでいる（『原爆に生きて』二五六頁）

このように被爆者本人だけではなく、本人を取り巻く社会のありようを描いているという点も、『原爆に生きて』の手記の一つの特徴である。

最後に、この二つの手記に関して特に注目したいのは、エンディングの言葉である。『原爆体験記』の手記は、

恵美ちゃんも私もみんな戦争のために女学生時代の夢を味わうこともなく一生めちゃめちゃに壊されてしまった。けれどもこの尊い多くの犠牲者によって平和が築かれて行くのだ。たら、この上なくうれしくてならないのだけれど……（一九六五年版『原爆体験記』一九九頁）

という平和へのささやかな願いで終わっているのに対して、『原爆に生きて』の手記では、

庭に咲くつぼすみれの、可憐ではあるが何物にもたえないく、何処かしらしんのある強さを見る時、私も、小さな力ではあるがどこまでも平和を叫びながら生きて行きたい。せめてもの生き甲斐を私はそこに見つけ出していきたい（『原爆に生きて』、二五七頁）。

と、著者の能動的な態度が示されている。ここで用いられている

「私も」という表現は、とくに注目に値する。ここでは明らかに、組織的な運動が意識されており、その組織的運動とは、山代巴や川手健らが結成のために尽力した「原爆被害者の会」にほかならないからである。このように、『原爆に生きて』をまとめる営みのなかからは、平和のために闘うことに「生き甲斐」を見出すような主体性をもった人々が生まれてきた。実際この手記の筆者はのちに「広島県学徒犠牲者の会」を発足させているが、このように、『原爆に生きて』に手記を寄せた被爆者の中には、その後被爆者運動に積極的にかかわった人が少なくなく、のちに山代巴は、『この世界の片隅で』において、中前妙子を含む『原爆に生きて』の書き手たちについて、「これらの人々は今も、いずれかの被爆者組織の中心的な活動家である」（『この世界の片隅で』、一五六頁）と述べている。

以上のように、『原爆に生きて』は、被爆者を直接訪問し、関係を築きながら、言葉を持たない被爆者たちから言葉を引き出していく、という〈表現〉の方法をとっており、またその方法によって被爆者の組織化を進めていく、という〈運動〉にもつながっていた。そういう意味では、『原爆に生きて』は、山代巴や川手健らの考え方を実現した、〈運動〉と結びついた〈表現〉、〈表現〉と結びついた〈運動〉であったといえる。先行研究でも、『集団記録方式が有効に社会に機能しうる実例を提示してみせた』（長岡一九七三、三四頁）、「文学運動の一つ」（小田切一九五五、二〇二頁）と評価されているが、まさにその通りであると考ええる。

ところで、このように占領下・朝鮮戦争下からその後にかけての困難な時期に〈表現〉と結びついた〈運動〉を担い、被爆者の

組織化に尽力した川手健は、一九五五年以後、原水爆禁止運動・被爆者運動が大きく展開していくなか、運動の周縁へと追いやり、一九六〇年には自死してしまうことになる。前述したように、川手健の五回忌の集まりを機に山代巴・大牟田稔らを中心に「広島研究の会」が生まれ、その最初の成果として『この世界の片隅で』が刊行されることになる。したがって、『この世界の片隅で』は、一九六四年の時点で「川手健の方法」が想起されたことにより生まれたとも言える。次節では、『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』への連続性と差異、あるいは、方法的に連続しているからこそ起こった展開を明らかにしていきたい。

3 ルポルタージュ『この世界の片隅で』をめくって

最初に述べた通り、一九六五年の『この世界の片隅で』を適切に位置づけるためには、一九五三年に編まれた被爆者の手記集『原爆に生きて』からの流れを明らかにする必要がある。2では、同じ時期に出た他の手記と比較しながら『原爆に生きて』とはどういうものであるかを見た。その結果『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』との密接な関係が明らかになったが、しかし、『原爆に生きて』を原点に持つ作品としては、『この世界の片隅で』のほかに、同じく一九六五年に刊行された『原爆ゆるすまじ』もある。そこで、まずは、『原爆に生きて』から『原爆ゆるすまじ』への脈絡、両者の共通性と異質性について見ておこう。

『原爆ゆるすまじ』は、『原爆に生きて』と同じく、被爆者の手記集であり、『原爆に生きて』と共通する書き手が二人（温品道

義、山下寛治) いる。加えて、『原爆に生きて』との共通性としては、八月六日当日の経験のみならずその後の生活や運動との関わりが書き込まれていること、さらには川手健への言及を含むことなども、指摘できる。

一方、『原爆に生きて』との異質性としては、この時点ではすでに書き手の被爆者たちが確固とした組織的基盤を持っており、またすでに彼らが主張すべき事柄、要求すべき事柄を持っている、という点を指摘できる。『原爆ゆるすまじ』は、分裂後の組織の一方の側に立ちつつすでに主張すべき事柄、要求すべき事柄を明確に持っている人々の言葉をまとめたという印象が強く、言葉を持たない被爆者から言葉を引き出しつつ彼らの組織化を押し進めようとした『原爆に生きて』とは(表現)の点でも(運動)の点でも大きく性格の異なるものとなっている。

『原爆ゆるすまじ』の執筆者の多くは、被爆者運動や部落解放運動、労働組合などに深い関係を持った人々で、各組織のリーダー的人物であるといえる。その例としては、たとえば、長崎で被爆しの中に詩集等を刊行して長崎生活をつづる会などで活躍した福田須磨子や、峠三吉の『原爆詩集』の挿絵を描いた四国五郎、被差別部落の福島地区で原爆被害者の会の発足に参加した金崎是、二重被爆者としてのちに有名になる山口彊、そして『この世界の片隅で』にも文章を寄せている岡山医科大学の杉原芳夫などが挙げられる。

また、『原爆ゆるすまじ』には、一二年前に刊行された『原爆に生きて』にも手記を寄せている山下寛治と温品道義の二人も第二の手記を寄せている。山下寛治の場合は、『原爆ゆるすまじ』にお

いても、『原爆に生きて』においても、手記は日記形式となっている。しかし、『原爆に生きて』の手記では、被爆当日についてはあまり書かれておらず、日記は原爆投下後一ヶ月の九月六日から、山下が一年後に全通中央執行委員として東京へ行くまでの間を記録している。これに対して『原爆ゆるすまじ』では、日記は一九四五年八月四日から始まり、被爆当日のことが詳しく記されているとともに、一九六五年現在までの出来事も細かく描かれている。とくに原爆症との闘いや被爆詩人としての活動のこと、「われらの詩の会」との関わりなどが中心になっている。つまりここでは、彼が運動家としてどのように成長してきたかということが主題になっており、一二年前の手記とくらべてここでは山下は平和運動の活動家として成熟した意識を持つに至っているといえる。

温品道義の場合も同じで、『原爆に生きて』においては主に傷害年金を受給できるようになるまでの険しい道のりが語られているのに対して、『原爆ゆるすまじ』の手記では、一二年前の手記ではほとんど触れられていなかった家族のことや、一九五二年にはじめて川手健に会ったときの記憶なども書かれており、『原爆に生きて』より詳しく記されている。そして、その後被爆者運動とどのように関わってきたかということが書かれ、自宅で原爆被害者相談連絡所を立ち上げるまでの経緯が語られている。すべてを失い、ゼロの状態からそれぞれがいかに立ち上がり、運動に関わってきたかということ語っている点で、『原爆ゆるすまじ』の全手記を通じての特徴であるといえる。

一九五三年の時点ではいまだ組織的な被爆者運動は存在しておらず、むしろ『原爆に生きて』こそが被爆者の組織化の起点とな

った。したがって、『原爆に生きて』は『原爆ゆるすまじ』の原点であるといえるが、一方、両者には大きな性格の違いもある。

『原爆ゆるすまじ』においては、すでに確固とした組織的背景を持つにいたった被爆者運動の担い手たちがそこに至るまでの歩みを自信を持って語っているのに対して、『原爆に生きて』においては、いまだ自らの組織も持たない被爆者たちが暗中模索のなかで被爆後のみずからの生活を語っていた。山代巴や川手健の役割は、彼らからそのような言葉を引き出し、その言葉を運動の組織化につなげていくことであつたのであつた。

『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』への脈絡という問題に戻ると、『この世界の片隅で』の書き手たちは、『原爆ゆるすまじ』の書き手たちと同じように自分たちの歩みを自信をもって語るのではなく、かつて『原爆に生きて』において試みられたように、一九六五年の時点でもまだ声をあげることのできなかった人々から言葉を引き出そうとしているという点が重要である。ルポルターージュとしての『この世界の片隅で』は、『原爆に生きて』の方法を継承して、「発表の機会に恵まれない人々の」ところへ「直接訪問してお願いし、……自分達の主観をまじえない」という原則を強く意識していた。

実際『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』との関係について見てみると、この二つの作品が共通しているのは、その方法——『この世界の片隅で』「まえがき」の言葉を用いるなら「故川手健の方法」——を自覚的に継承していることである。「広島研究の会」の人々は、すでに述べたように、被爆者のなかでも当時顧みられることの少なかった人々——たとえば、いわゆる原爆

スラムや被差別部落の被爆者や、原爆小頭症患者や、沖繩の被爆者など——の中へ入っていき、彼らと関係を築いて、彼らの「この世界の片隅で」の闘いを、世に知らしめようと（表現）した。

また、〈運動〉という面を述べると、かつて「原爆被害者の会」が生まれたように、今度は小頭症の子供たちとその親の組織「きのこ会」が生まれることになる。大きくなった運動組織にひそむ形骸化に違和感を表明しつつ、「現在の被爆者組織の分裂とはかわりなく」（ii頁）当時顧みられることの少なかった被爆者たちに寄り添おうとした「広島研究の会」は、『原爆に生きて』が編纂された当時の態度を積極的に引き継ごうとしていたと言える。

『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』との異質性としては、手記集ではなく、ルポルターージュというかたちがとられている、という点を指摘することができる。言葉を持たない人々に言葉を与えることよりも、「この世界の片隅で」生き／闘っている人々の顧みられることのない姿を伝えることに重きが置かれている。

この場合、語り手は、当事者ではなく、「広島研究の会」のメンバーであることになる。このようにルポルターージュというかたちがとられたのは、当時すでに被爆者の手記はたくさん刊行されており、その背後には被爆者の組織も反核運動の組織もあり、しかもそれが分裂に陥っているような状態だったからではないかと思われる。「広島研究の会」の人々は、そのような状況のなかでもう一冊手記集を編むことよりも、肥大化・形骸化した組織的運動から取り残されている人々の姿を伝えることに重きを置くことにしたのでと考えられる。実のところ、「広島研究の会」に集った人々の多くは、作家やジャーナリストで、自ら伝えることのでき

る能力を持った言葉の専門家たちであった。

『この世界の片隅で』においてももう一つ重要なことは、「被爆者／原爆」だけに限定することなく、被爆だけを強調する平和運動から距離をとり、できるだけ多様な声に耳を傾け、片隅からのさまざまな訴えを社会に届けたことである。そのなかで、被爆者の闘いと被差別部落の闘いという二つの闘いが、同じ線上の闘いであることを強調したことが、とりわけ注目に値する。「古い日本人の思想はどのように破壊されたのか、または破壊されなかったのか」(Ⅷ頁)ということを追究しようとした「広島研究会」の仲間たちは、「部落差別の問題を取り上げ、部落の二十年の変わり方を探」(Ⅷ頁)ろうとした時に、実に重要なことを発見することになる。

『この世界の片隅で』の「まえがき」で山代巴が述べているところによると、「福島町」を執筆した多地映一は、「故郷の広島に、いまだに部落差別が残っている」とは思つて」(Ⅹ頁)もいなかつたため、「自分の眼と耳で実態を確かめようと、福島町に二ヵ月住」(Ⅹ頁)んだという。そして山代巴が彼に福島町での感想を尋ねると、彼は、「私の福島町での驚きは、部落差別が現在もなお生きていくということでした。しかしその底から、『人間を差別する者』に対する、じつに的確で手きびしい批判精神が育つて来ていることは、差別が生きているということよりもなお驚きでした。そして、部落差別をなくそうという闘いが、そっくり被爆者の平和運動に直結していることは、原爆禁止を闘う上の、大きな示唆となるように思えました」(Ⅻ頁)と述べたという。まさに原水爆時代において、原爆を禁止していく先頭に立っている被爆

者たちの要求と闘いに、未解放部落の問題がぴったり一致していることに、山代巴らは気づいたのである。

「原爆」だけにとどまらず、在日朝鮮人の問題や被差別部落の問題など、さらに広い視野を持つている点は、『この世界の片隅で』の一つの特徴である。実際、「相生通り」を読んでみると、在日朝鮮人を含むさまざまな背景をもつた人々が「高度経済成長、公共利益、または公共福祉、平和都市建設などのために、あちらで一世帯、こちらで一世帯、目だたぬていどに棄てられ、ふるい落とされて、どんなに貧困でも恥ずかしくなく暮らせる、この河川敷へ落ちて来た」(山代一九七一、五〇頁)さまを明らかにしようとしているという印象が強い。本書の後半に登場する原爆孤児や胎内小頭症の子どもたち、沖縄の被爆者も、「原爆」を共通点として持ちつつ、「相生通り」の在日朝鮮人や「福島町」の被差別部落民と同じように、「棄てられ」た人々であるといえる。

ところで、一九五三年に『原爆に生きて』が刊行された後、被爆者の闘いを農民たちに伝えるに手記を持つて農村へ帰り、主婦とともに原水爆禁止世界大会の署名運動に励んだ山代巴にとって、まだ封建的な旧憲法の古い価値観にとらわれている村落共同体の農婦たちも、「棄てられ」た民であったことは重要である。このように「体験を書いて自分を確かめ、それを発表して理解の輪をひろげ、輪が広がるたびに勇気を倍に」(山代一九六五b、九二頁)するという『原爆に生きて』の実践が、農村では女性を中心とした生活記録へ発展していき、のちに山代巴の代表作とされる『荷車の歌』の創作にもつながっていったのであった。

山代巴が再び農村の文化運動へ飛び込んでいく力と自信を得る

うえでとりわけ重要だったのは、多田マキ子という被爆した女性と出会いである。多田マキ子の証言は、『原爆に生きて』に「夫はかえらない」と題して収められており、さらに『この世界の片隅で』の「ひとつの母子像」には、被爆から現在までの二〇年の闘いを語る彼女の第二の手記とでもいえるものが載せられている。

多田マキ子は原爆によって大きな火傷を負い、精神的にも不安定になったため夫にすてられ、山代巴と初めて出会う一九五二年の秋には、子ども三人を育てながら失業対策へ出て何とか生活していた。しかし、原爆症で出血をし、体が弱くて気を失うこともあったため、毎日仕事に出ることが困難ななか、周囲の目も冷たく、ケロイドが醜いため風呂屋での入浴まで拒否されたり、さまざまな差別を受けていた。『この世界の片隅で』の「ひとつの母子像」では、山代巴が多田マキ子との出会いについて詳しく書いており、構成と内容の点で、この章は八編のルポルタージュの中でやや趣を異にしている。

この「ひとつの母子像」という章は、『原爆に生きて』編纂の経験を強く意識しており、当事者の長い手記を含むルポルタージュとなっている。この章で、山代巴は、一九五二〜五三年の広島での『原爆に生きて』編纂の経験を回顧したあと、『原爆に生きて』に手記を寄せた人々のその後を当事者の手記も引きながら紹介する。そして、おそらくは山代巴が代筆した多田マキ子Ⅱ立田松枝の第二の手記を引くかたちで、一九五三年には語られえなかったことが、あらためて語られる。山代巴は、『原爆に生きて』刊行後音信不通となっていた多田マキ子Ⅱ立田松枝と「広島研究会」の活動のなかで再会し、一九五三年の手記では庇護者とさ

れていた「K」に、じつは詐欺的・脅迫的手段で土地を奪われたことや、その後の失対労働の経験などが、新たな手記にまとめられ、この章の主要な部分を構成することになっている。山代巴は、戦後の広島における立ち退きの問題などを念頭に置きながら、「この世界の片隅で」生きてきたこのような母子の姿から、戦後日本の社会を捉えなおそうとするのである。山代巴によるこの章は、『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』の関係が最も明瞭な章であると言つてよいであろう。

多田マキ子との出会いが山代巴にとって重要だったことは、『原爆に生きて』から一二年後に再び彼女に手記を書かせていることから分かるが、「ひとつの母子像」というタイトルは、多田マキ子とその子供たちとの出会いが山代巴にとっていかに印象的であったかを示している。山代巴は、「ひとつの母子像」の前半で、初めて多田マキ子の小屋へ訪ねて行った際の様子を語っている。母はまだ失対から帰って来ておらず、三人の子供たちは外で遊んでいた。「窓のない狭い小屋の中は押入もなく、破れたフトンが敷かれたままで、その上によごれた衣類が散らかり、人間の住いとは思えない有様」（二五二頁）であったが、外で遊んでいた三人

の中の一、番小さい子が、「ひよこがはばたくように車を飛びおりて道の方へ走って出た。見るとたそがれの小道を這うようにこの家に近づいて来る人がいて、小さい子は「乳！」とその人に飛びつき、くろずんだ人影はかがんだまま胸を開いた。……私の眼にはこの一瞬の母子像が焼きつくように残った」（二五二頁）と山代巴は回想している。

多田マキ子から、夫にすてられたことや、ひどいケロイドを負

つているためさまざまなところで惨い扱いを受けていることを聞いた山代巴は、「母子の衣食住はすべて極悪の状態であった。けれどもこの母と子のひたすらに生きようとする姿は何ものにもまして魂のよごれを洗う力を持つてせまつて来た。その夜、私は家へ帰つても、自分が知らず知らずの間に犯されていた虚飾を恥じて眠れず、平和運動とはまず、赤裸な人間に立ちかえることからだと、心の底へ向けて叫んだ」（二五三頁）と記して、その日から多田マキ子の手記を書く手伝いすることになり、のちに被爆者運動に加わつて原爆訴訟の原告団の一人にまでなる彼女との関わりは、その後もずっと続いていった。

この多田マキ子のように手記を書くことによつて生きる自信と社会性を持つことができた被爆者が増えていく中で、被爆者は弱い存在ではなく、むしろ「平和へ向かつての闘いを激励する力」（山代一九六五a、五六頁）を持つていることを知らされ、あの母子の生きようとする強烈な力が山代巴を深く鼓舞したことは間違いない。

最後に、ルポルタージュを比較するという観点から、同じ年に刊行された『この世界の片隅で』と大江健三郎『ヒロシマ・ノート』を比較しておきたい。『ヒロシマ・ノート』は、目次を見れば明らかのように、そのキーワードとなっているのは「旅」と「人間」であり、外部の知識人が広島に「旅」をして、「重藤原爆病院長をはじめとする、真に広島思想を体現する人々」（一八六頁）と出会う、という内容になっている。「まさに広島の人間らしい人々の生き方と思想とに深い印象を受け」た大江は、「広島とこれらの真に広島のなる人々をヤスリとして、自分自身の内部の硬

度を点検し」よう、「自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島ofヤスリにかけ、広島ofレンズをとおして再検討」しようとしている（三頁）。そういう意味では、外部から来た当時の代表的な知識青年が非常に内省的・道徳的に広島に関わつていった記録がこのルポルタージュであるということができ、そういう書物として当時広く読まれたのだと考えられる。しかし、この書物の前景を占めているのは、広島ではなく、広島と出会うことで感動する大江であり、読者は大江の感動を追体験することで感動したのではないかと感じられる。

一方、『この世界の片隅で』について見てみると、「広島研究会」のメンバーに「共通するものは、お互いが被爆広島と深い関係を持つているということだけ」（ii頁）であつたとある。そして彼らは、「現在の被爆者組織の分裂とはかわりなく、被爆からの二〇年の歴史を明らかにしよう」とし、「現地の片隅での闘いが私どもを変化させた力は大きい」と述べ、「広島研究会」は、どこまでも現地に密着して、中断することのない研究を進めなければならぬ」（xvi頁）と言う。このような、広島of「現地に密着」して「この世界の片隅」から「被爆からの二十年の歴史を明らかにしよう」とする本書は、現時点から見るときわめて重要な仕事であるが、発刊当時はともかく、その後急速に忘れられていったように思われる。

おわりに

以上、『原爆に生きて』と『この世界の片隅』が、どれほど先

駆的で重要な仕事であったかを見てきた。また、この二つの作品はどのように関係しており、同じ時期に出た他の手記集やルポルタージュとどう違うのかも明らかにした。最後に、本稿の主張を支える重要な発言として、『この世界の片隅で』の最後のルポルタージュ、大牟田稔「沖繩の被爆者たち」の末尾の一節を引いておきたい。

二十年前戦場になり、敗戦後は米国核戦略の基地となった沖繩……で原爆被爆の鮮烈な体験を抱いて戦後を生きぬいてきた人々と会い、その揺ぎなき意思を知ってゆくたびに、私の胸には一つの文章がはつきりと蘇えてくるのだった。

「……被害者の立上りのおくれた根本原因が占領体制の圧力に外ならなかったことを疑うものはあるまい。然し、ここで強調しておきたいのは被害者の組織化がおくれた責任の一端は、原爆を平和の立場から取り上げようとした人々の側にもあるということである。これらの人々はたしかに原爆を人類最大の罪悪として非難し、原爆の禁止を全世界に訴えはした。だが彼等はその運動を当の原爆被害者の中から引き出すとはしなかった。疑いもなく戦争を望む勢力にとつては最も打撃となるに違いない筈の、原爆被害者の団結と被害者の組織的な平和運動に対しては余り関心が払われはしなかった。被害者が苦しい中をどの様に生き抜いていこうとしているかについての関心さえ極めて薄かったと云える（手記集『原爆に生きて』あとがき）——故川手健が十二年以上も昔、広島で書き記した文章である（二二二頁）。

ここで述べられているように、「広島研究会」においては、「その運動を当の原爆被害者の中から引き出す」という川手健の方法が強く意識されていた。原水爆禁止運動が分裂していくなかで、この方法の必要性はいっそう強く自覚されていたものと考えられる。『原爆に生きて』と『この世界の片隅で』を貫くものは、〈表現〉においても、〈運動〉においても、このような方法であったと言つてよいであろう。ただし、一九五〇年代初頭と一九六〇年代半ばの状況の違いに規定されて、このような方法に基づく実践は、手記集の編纂とルポルタージュの刊行という異なる現れ方をしたと言える。しかしながら、それは、いま見たような方法が連続していたからこそその転回であったと言えるであろう。そういう意味では、山代巴や大牟田稔がこだわった「川手健の方法」から〈表現〉と〈運動〉の歴史を捉えなおす試みが必要であるように思われる。

参考文献

手記集・ルポルタージュ *↓は再録を示す

広島市民政局社会教育課編 一九五〇『原爆体験記』広島平和協会

↓広島市原爆体験記刊行会編 一九六五『原爆体験記』朝日新聞社

↓同 編 一九七五『原爆体験記』朝日選書

中村武雄編 一九五〇『ヒロシマを忘れるな—No More Hiroshima's』自由青年出版社

由青年出版社

原爆被害者の手記編纂委員会編 一九五三『原爆に生きて』三一書房

↓小田切秀雄編 一九五五『原子力と文学』講談社に抄録

↓昭和戦争文学全集編集委員会編 一九六五『昭和文学全集13 原子爆弾投下さる』集英社に抄録

一一月号

↓家永三郎・小田切秀雄・黒古一夫編 一九九一『日本の原爆記録』

第三卷（日本図書センター）に再録

山代巴編 一九六五『この世界の片隅で』岩波新書

広島県被爆者の手記編集委員会編 一九六五『原爆ゆるすまじ』新日本

出版社

大江健三郎 一九六五『ヒロシマ・ノート』岩波新書

家永三郎・小田切秀雄・黒古一夫編 一九九一『日本の原爆記録』全

二〇巻、日本図書センター

山代巴十「原爆被害者の手記編集委員会」関係者十「広島研究会」

関係者

山代巴 一九五五「広島の文化文学運動」『文学』五月号

山代巴 一九六四「原爆の教えるもの——被爆者の記録運動から」、調

布市民文化団体協議会編『第一回調布市文化市民講座（第四日）』

山代巴 一九六五a「女性と差別と文学」『部落』一〇月号

山代巴 一九六五b「一つの補足・『この世界の片隅で』を編集して—

第一一回原水禁世界大会のあとに」『文化評論』二月月号

山代巴「あとがき」、山代巴・峠三吉編 一九七〇『原子雲の下より』

第三版、青木文庫

山代巴 一九七一「三里塚と広島を結ぶ—棄てられる民の場」『展望』

山代巴 一九八九「詩集「原子雲の下より」と私のかかり」、被爆

実態調査会編『原子雲の下より 新編8・6少年少女詩集』亜紀書房

山代巴 一九九一『山代巴文庫 第二期四 原爆に生きて』径書房

川手健 一九五三「原爆被害者の訴え」『宗教公論』四月号

川手健 一九五三「原爆文学についての雑感」『広島文学』八月号

川手健を語る会編 一九九五『川手健を語る』川手健を語る会

野村英二 一九九三『原爆、そして戦後』亜紀書房

文沢隆一 一九九六『ヒロシマの歩んだ道』風媒社

大牟田稔遺稿集刊行委員会編 二〇〇二『ヒロシマから、ヒロシマへ—

大牟田稔遺稿集』溪水社

その他

小田切秀雄編 一九五五『原子力と文学』講談社

長岡弘芳 一九七三『原爆文学史』風媒社

長岡弘芳 一九七七『原爆民衆史』未来社

宇吹暁 一九九九『原爆手記掲載図書・雑誌総目録 1945-1995』日外ア

ソシエーツ

広島県被爆協「空白の十年」編集委員会編 二〇〇九『空白の十年』

被爆者の苦闘 広島県原爆被害者団体協議会

牧原憲夫 二〇一三「はじめの一步」のために—山代巴の課題意識』『年

報日本現代史』一八、現代史料出版